

令和7年度

光と鏡で不思議を発見！

～東京すくわく事業 探究ワークショップ実施報告～

1. 活動のテーマ

<テーマ>

鏡と光

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

年中児は日常生活の中で「なぜ?」「どうして?」という疑問を持つことが増え、身近な現象への興味関心が高まっている。本園では、子どもが自ら試し、発見する体験を大切にしており、遊びを通じた探究活動を重視している。鏡や光は身近でありながら不思議さを感じやすく、子どもたちの探究心を引き出す題材として適している。

<テーマの設定理由>

鏡に映る世界や光による変化は、子どもにとって直感的に驚きや発見を得られる教材である。第1回では鏡の基本的な性質に触れ、第2回では空間的な広がりを感じ、第3回では光や色の変化へと発展させることで、段階的に理解と興味を深めることをねらいとした。

2. 活動スケジュール

講師を招き3回に分けワークショップを開催しました

- ・第1回(12月12日)
鏡を使った基礎的な遊びと発見(映り方・角度・対称)
- ・第2回(2月6日)
大型鏡を用いた体験(空間・身体感覚)
- ・第3回(3月5日)
光・影・色の変化をテーマとした活動

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定

鏡（手鏡・ミラーマット）、光るテーブル、イロイロモザイク（色付きパネル）、おままごとセット（ケーキ等）、ドールハウス、プリンスソフト（粘土）、自然物（落ち葉）などを用意。鏡の配置を変えたり囲まれた空間を作るなど、子どもが自由に試せる環境を整えた。

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、教諭との関わり等）

【第1回】

- ・鏡の角度を変えて友達を探す活動では、子ども同士で相談しながら試行錯誤する姿が見られた。
- ・半分の絵を鏡に映して完成させる活動では、「すごい！」と驚きながら繰り返し試す様子があった。
- ・鏡を組み合わせておままごとのケーキの数が増えることに気づき、「もっと増えるかな？」と発展的な発想が生まれた。

【第2回】

- ・大型鏡を使うことで、自分の体全体が映る体験に変化し、見え方の違いに気づく姿が見られた。
- ・鏡に囲まれた空間では、「どこを見てもいる！」と驚きや笑いが広がった。
- ・寝転ぶ活動では、「空に浮いているみたい」といった感覚的な気づきが生まれた。

【第3回】

- ・鏡、光、光テーブルと3ブースに分かれ子どもたちの好きな活動を見守る。
- ・鏡の活動では、小鏡とミラーワールドを用いておままごとのケーキを入れることでたくさん増えたケーキに「本物はどれ？」と問いを持ち、確かめながら遊ぶ姿が見られた。
- ・光の活動では、色付きパネルに光を当て万華鏡の様な模様をつくる。また、プリンスソフトで好きな形を作り光を当てると個性あふれる影絵ができ、様々な形を作り出す姿が見られた。ドールハウスは壁がない作りになっているため、光を当てることで影絵のバリエーションが増えるのを楽しんでいた。
- ・光るテーブルでのなぞり活動では、普段と違う見え方に集中して取り組んだ。文字や模様を丁寧にペンで紙に書きだすことに集中して取り組んでいる姿が見られた。

・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり

子ども同士で意見を出し合いながら試す姿が多く見られた。「どうしてこうなるの？」
「やってみよう」といった対話が自然に生まれ、教諭はそれを受け止めながら、気づきを深める関わりを行った。繰り返し試す中で、発見→疑問→再挑戦という探究のサイクルが見られた。

<活動の様子>



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・身近な素材であっても、環境設定や提示の仕方によって子どもの探究の深まりが大きく変わることを実感した。

・段階的に活動を展開することで、子どもたちの気づきや理解が積み重なっていく様子が見られた。

・子ども同士の関わりが探究をより豊かにし、協働的な学びにつながっていることが確認できた。

・「なぜだろう」と考える姿を引き出すためには、正解を教えるのではなく、試せる環境を整えることが重要であると再認識した。